5.4. 動詞の派生形

5.3.3.で動詞の派生辞について述べたが，ここではそれらの派生辞が付加された動詞の派生形の用法について検討する。なお，派生形動詞の例を挙げる場合，（拡大）語根と派生辞をハイフンで区切って表わすが，その場合の派生辞は，母音調和を起こした表層形である[12]。

5.4.1. 相互形

派生辞： -an-

ある行為を複数の動作者が互いに相手に向かって行なう，すなわち「互いに～し合う」という意味を表わす。また，動作の繰り返し，あるいは強調を表わすこともある。

「相互」

1) -bág-an-	「分け合う」	cf.	-bág-	「配る」
2) -kámul-an-	「つかみ合う」	cf.	-kámul-	「つかむ」

「反復，強調」

3) -tímb-an-	「砕く」	cf.	-tímb-	「踏みつぶす」
4) -kásul-an-	「何度もやぶる」	cf.	-kásul-	「やぶる」
5) -dʒɔ́gw-an-	「従う」	cf.	-dʒwɔ́gw-	「聞く」

「相互」の解釈がなされる場合の動詞は必ず他動詞で，主語は複数である。一方「反復，強調」の解釈がなされる場合には，動詞は他動詞に限らず，主語も複数形には限らない。従って，主語が複数形で他動詞の場合はどちらの解釈も可能ということになるが，対象物の状態の変化を促す他動詞の場合には「反復」の解釈がなされやすい。

5.4.2. 強意形

派生辞：-alil- / -alel-（語根の母音が e, o）/ -alɛl-（語根の母音がɛ, ɔ）

動詞の基本形が持つ意味を強める。ただし，この派生辞を付加できる動詞は限られている。

---

[12] ただし，ハイフンで区切られた形態素を表層形で記すのは派生形動詞の例を挙げる場合だけであり，例文（11～34）の下に記した分析文に関しては，通常どおり基底形で記す。

6) -líŋg-alil-	「見つめる」	cf.	-líŋg-	「見る」
7) -máɲ-alil-	「理解する」	cf.	-máɲ-	「知る」
8) -dʒɔ́m-alel-	「干上がる」	cf.	-dʒɔ́m-	「かわく」

この強意形は，派生辞 -an-による意味の強調に似ているが，派生辞 -an-の場合には回数が多いことを表わしているのに対して，派生辞 -alil- の場合には，事態の程度が問題になっている。しかしながら，相互形 -an-によって強調されている例５と強意形 -alil-によって強調されている例７，８のように，強調の種類に差が見られない場合もある。

5.4.3. 使役形

-as- (aは語根の母音と同じ母音になる)

9) -hémal-ɛs-	「売る」	cf.	-hémɛl- 「買う」
10) -hénd-es-	「運転する」	< スワヒリ語	-endesha「運転する」

他のバンツー諸語でも，-is-という使役を表わす派生辞が見られること，また例９のように「売る」という動詞を「買う」の使役形で表わす例が他のバンツー諸語にも多く見られること (梶 1984:35, Kagaya 1987:98, Yukawa 1987a:41, 1987b:44, 1992:51, Felberg 1996:110 他) などから，-as- を使役形派生辞としてあげたが，この派生辞が用いられるのは，例９を除けば，すべて例 10 のようなスワヒリ語からの借用語である。マテンゴ語では「買う」を表わす動詞は，-hémɛl-の他に-lɔ́mb-があるが，これには使役形派生辞を付けることはできない。かつては，これらはいずれも「自分が持っているものを欲しいものと交換する」という意味で用いられていたということである。「買う」および「売る」という概念は当然のことながら，貨幣経済がマテンゴ社会に入ってくるまではなかったのであるから，-hémal-ɛs-「売る」という動詞を借用したか，あるいは使役形派生辞を他言語から持ち込んだ可能性が高い。

5.4.4. 適用形

-il- / -el- (語根の母音が e, oの場合) / -ɛl- (語根の母音がɛ, ɔの場合)

適用形は，その用法が複雑であり，バンツー諸語の研究の中でも，最も頻繁に取り上げられるテーマのひとつである [13]。

---

[13]最近のものでは，梶(1997)，Ngonyani (1996)，Simango (1995)，Harford (1993)，Alsina and Mchombo(1990, 1993)，などがある。

5.4.4.1. 統語的な特徴

適用形の用法について考察する前に，適用形の統語的特徴を説明する。まず例 11 と 12 で同じ動詞の基本形と適用形とを比較する。例 11 は，派生辞の付かない基本形である。同じ動詞に適用派生辞を付けると例 12 のようになる。

11) gugolo lúhǎ̱gi 「君が皿を洗っている」
gu - gólo(l -a) lúha̱gí
S2sg - 「洗う」- 基F 「皿(11)」

cf. 11') gulúgolo lúhǎ̱gi 「君が（その）皿を洗っている」
gu - lu - gólo(l - a) lúha̱gí
S2sg - O(11) -「洗う」- 基F 「皿(11)」

12) guŋgolule lûsi lúhǎ̱gi 「君がルーシーさんの代わりに皿を洗っている」
gu - mu - gólol-i(l - a) lúsi lúha̱gí
S2sg - O3sg-「洗う」-AP- 基F 「ルーシー(3sg)」 「皿(11)」

cf. 12') * guŋgolule lúhǎ̱gi lûsi
gu - mu - gólol-i(l - a) lúha̱gí lúsi
S2sg - O3sg-「洗う」-AP- 基F 「皿(11)」 「ルーシー(3sg)」

12") * gulugolule lûsi lúhǎ̱gi
gu - lu - gólol - i(l - a) lúsi lúha̱gí
S2sg - O(11)-「洗う」- AP - 基F 「ルーシー(3sg)」 「皿(11)」

適用形にした例 12 の場合には，基本形を用いた場合の例 11 よりも項の数がひとつ多くなる。ここでは「ルーシー」が新たに加えられた項である。例 11 において，動詞 -golol-「洗う」の目的語はlúhǎ̱gi「皿」である。O辞を付ける場合には，O辞は lúhǎ̱gi に呼応する（例 11'）。ところが例 12 のように適用形になると，「洗う」の対象は例 11 と同じく「皿」であるにも拘わらず，O辞は「皿」ではなく，新しく加えらた項「ルーシー」に呼応している。つまり，新しく加えられた項は，適用形動詞の目的語（のひとつ）である。これを「適用目的語」と呼ぶことにする。

例 13 の動詞の基本形は，自動詞 -lél-「泣く」であるが， 基本形が自動詞の場合でも，

適用形になれば適用目的語をとる。

13) dʒugúlele gwêŋga. 「彼は君のせいで泣いている」

dʒu - gu - lél - i(l - a) gwéŋga.

S3sg - O2sg -「泣く」- AP - 基F 「君(2sg)」

例 12 が示すとおり，適用目的語が加わっても「動詞のあらわす動作・行為が直接施行されている対象」を表わすのは基本形での目的語であって，この場合の「皿」が持っている，いわゆる「直接目的語」としての機能は基本形の場合と同じである。

さて，バンツー諸語において，何を目的語と捉えるか，というテストとして，①動詞の直後に位置することができるか，②その名詞と文法呼応したO辞がつけられるか，③それを主語として受動化できるか，という３つが提唱されている（Kisseberth &Abasheikh 1977:183, Hyman & Duranti 1982:220, Hualde 1990:243 他）が，例 12 が示すように，適用形での「直接目的語」はこのどれにも当てはまらない[14]。つまりこのテストに従うと，「直接目的語」は適用形になった時点で目的語の性質を失ってしまうということになる。しかしながら「動作の対象物」という機能を見れば，やはりこれを目的語のひとつと考えるのが妥当である。そうなると，もともと目的語をとっていた動詞が適用形になると，動詞は目的語をふたつとることになるが，これらの目的語に関して既述のことをまとめると，以下のようなことが言える。

- 動詞の直後に位置するのは適用目的語である
- 適用形動詞のO辞は常に適用目的語に呼応する。

動詞の中には，-lékakɛ-「釈放する」，-pé-「追い越す」，-péke-「与える」のように，常に人物を目的語にとり，それに呼応したO辞を必要とするものがある。そのような動詞を適用形にすることはできない。

14) gundɛkakǐ dʒwɔ̌mbɛ 「君は彼を釈放した」

gu - mu - lékakɛ - i(tí) dʒwɔmbí

S2sg - O3sg -「釈放する」- 完F 「彼」

[14] ただし，マテンゴ語には受動表現がないので，③に関してはテストができない。

14') * gutúlɛkakakǐ dʒwɔ̌mbɛ ［我々に代わって君は彼を釈放した］

gu - tu - lɛ́kakɛ- il - i(tí) dʒwɔmbí

S2sg - O1pl -「釈放する」-AP - 完F 「彼」

適用形動詞は適用目的語をとるが，常にO辞が付加される必要があるというわけではない。基本形の場合と同じく，O辞が必須なのは適用目的語が人物の場合だけである。

15) ŋ́kɔŋgu gwahá̋guki paɲûmba 「木が家に向かって倒れた」

ŋ́kɔŋgu gu - a - háguk - il - i(ti) paɲúmba

「木(3)」 S(3) - 過 T-「倒れる」- AP - 完 F 「家に(16)」

cf. 15') ŋ́kɔŋgu gugúhaguki gwêŋga 「木が君に向かって倒れた」

ŋ́kɔŋgu gu - a - gu - háguk - il - i(ti) gwéŋga

「木(3)」 S(3) - 過 T- O2sg -「倒れる」- AP - 完 F 「君」

適用目的語が独立人称代名詞の場合には，呼応するO辞に代名詞の機能をさせ，適用目的語自体は省略することもある。その場合，適用目的語は接辞としてのみ現われることになるので，表面的には動詞の項の数は基本形の場合と同じになる。

16) dʒugúleme litûhi 「彼は君のために畑を耕している」

dʒu - gu - lém - i(l - a) (gwéŋga) litúhi

S3sg - O2sg -「耕す」- AP - 基 F 「君」 「畑(5)」

cf. 16') dʒulema litûhi 「彼は畑を耕している」

dʒu - lém - a litúhi

S3sg -「耕す」- 基 F 「畑(5)」

5.4.4.2. 用法

適用目的語が，動詞が表わす行為・事態の直接施行される対象でないことは，これまで見てきたとおりであるが，それでは，動詞とどのような関係にあるのだろうか。ここでは適用目的語と動詞との係わりかたを基にして，マテンゴ語の適用形の用法を検討していく。

5.4.4.2.1. 影響

動詞の表わす行為・事態によって，適用目的語として表わされる人物に対して利益や被害などの影響が生じていることを表わす。適用目的語になるのは，受益者，被害者，体験者，実感者などである。この用法では，人物以外は適用目的語にならない。

「受益者」

17) dʒuguloki úleli 「彼女は君の代わりに/ 君のためにゴザを編んだ」

dʒu - a - gu - lók - i(l - a) úleli

S3sg - 過 T - O2sg -「編む」- AP - 基 F 「ゴザ(14)」

これは，適用形の用法の中で最も代表的なものであると考えられる。「君」が本来編まなくてはいけなかったゴザを「彼女」が編んでくれている，あるいは，「君」に贈るために「彼女」が編んでいる，といった状況を表わす。

「被害者」

18) dʒugútipí iŋgɔ̂lɔ 「彼は君の畑の畝を踏みつぶした」

dʒu - a - gu - típ - il - i(ti) iŋgɔ́lɔ

S3sg - 過 T - O2sg -「踏みつぶす」- AP - 完 F 「ンゴロ畑 (9)」

19) ŋ̍kɔŋgu gugúhabuki paɲúmba lísɔ 「昨日君の家の上に木が倒れた」

ŋ̍kɔŋgu gu - a - gu - hábuk - il - i(ti) paɲúmba lisú

「木(3)」 S(3) - 過 T - O2sg -「倒れる」- AP- 完 F 「家に(16)」 「昨日」

cf. 19') ŋ̍kɔŋgu gwahábuki paɲúmba dʒâkɔ lísɔ

「昨日君の家の上に木が倒れた」

ŋ̍kɔŋgu gu - a - hábuk - il - i(ti) paɲúmba dʒákɔ lisú

「木(3)」 S(3) - 過 T -「倒れる」- AP- 完 F 「家に(16)」 「君の(9)」 「昨日」

適用目的語が表わしているのは，被害・影響を受けた人物である。直接目的語で表わされている対象物の所有者である場合が多い。例 19 と 19'は，どちらも起こった事態は同じであるが，例 19 のほうは，木が家の上に倒れることで，「君」が被害・影響を受けたということに焦点がある。それに対して，例 19'は焦点に関しては中立的である。

「実感者」

属性や状態を表わす自動詞が適用形になった場合には，適用目的語で表わされている人物がそれを実感・体験した，という意味になる。

20) likɔlú ljugubábǐlɛ 「おかずは君に辛かった」

likɔlú li - gu - báb - il - i(tí)

「おかず(5)」 S(5)- O2sg -「辛い」- AP - 完F

21) dʒugubệpǐlɛ 「彼は君に不潔な思いをさせている」

dʒu - gu - bẹ́p - il - i(tí)

S3sg - O2sg -「不潔である」- AP - 完F

5.4.4.2.2. 方向

「～へ向かって」という方向性が含まれる行為や事態を表わす用法である。適用目的語はその方向を表わす。

22) gwahãgukí ŋ̃kɔŋgu 「木が私に向かって倒れた」

gu - a - n - hágukk - il - i(ti) ŋ̃kɔŋgu

S(3) - 過T - O1sg -「倒れる」- AP - 完F 「木(3)」

23) dʒuguhandaki balûa 「彼は君宛に手紙を書いた」

dʒu - a - gu - hándak - i(l - a) balúa

S3sg- 過T - O2sg -「書く」 - AP - 基F 「手紙」

24) dʒusúpi kutêmbɔ 「彼はリテンボに引っ越した」

dʒu - súp - il - i(tí) kutémbɔ

S3sg-「引越す」- AP - 完F 「リテンボ(17)」

cf. 24') dʒusupití kutêmbɔ 「彼はリテンボから引っ越した」

dʒu - súp - ití kutémbɔ

S3sg-「引越す」- 完F 「リテンボ(17)」

25) paŋgɔ̂ndu ámatɛ̌ŋgɔ atḭlila mwamakɔ̂lɔ

「戦争中マテンゴ人は洞穴へ逃げた」

pa-ŋgɔ́ndu ámatɛŋgɔ́ a - a - tḭ́l - il - a(dʒɛ) mwamakɔ́lu

「戦争中(16)」 「マテンゴ人(2)」 S(2)-過 T-「逃げる」-AP - 非完 F 「洞窟の中(18))」

cf. 25') ámatɛ̌ŋgɔ atḭla ŋgɔ́ndɔ 「マテンゴ人は戦争から逃げた」

ámatɛŋgɔ́ a - a - tḭ́l - a(dʒɛ) ŋgɔ́ndu

「マテンゴ人(2)」 S(2)-過 T-「逃げる」- 非完 F 「戦争(9)」

26) dʒwakelabukila kwáka mwánalomi kábete「彼女は夫のもとへ引き返した」

dʒu - a - kélabuk - il - a(dʒɛ) kwáka mwánalomi kábete

S3sg- 過 T-「帰る」 - AP- 非完 F 属(17) 「男、夫(1)」 「再び」

cf.26') dʒwakelabuka kwáka mwánalomi kábete

「彼女はまた（2回め）夫の所へ帰った」

dʒu - a - kélabuk - a (dʒɛ) kwáka mwánalomi kábete

S3sg - 過 T-「帰る」 - 非完 F 属(17) 「男，夫(1)」 「再び」

例 23 は「君のために手紙を書いた」という「受益」の解釈も可能である。例 24 と 25 のように，基本形が「～から」という意味を含む移動を表わす動詞の場合は，適用形にすると「～へ」という到達点を表わすので，方向が逆になる。例 26 の-kélabuk-「～へ帰る」は，基本形に「～へ」という意味がすでにあるが，その場合には「出発点に引き返す」という意味になる。ただし，-dʒénd-「～へ行く」は，適用形派生辞がついてもこのようは方向の変化はなく，「到達点」の解釈では用いられない。-dʒénd-「～へ行く」を適用形にした場合には，例 27 のように「道具」（5.4.4.2.5.），あるいは例 28 のように「動機」(5.4.4.2.4.)の用法として解釈される。

27) dʒudʒɛndɛla ni ligâli 「彼は車で行く」

dʒu - dʒénd - il - a na ligáli

S3sg -「行く」- AP - 基 F 随伴 「車(5)」

28) dʒwágudʒɛndɛla kilḁ̂bu 「彼は明日（何か用があって）君を訪ねる」

dʒu - í - gu - dʒénd - il - a(dʒɛ) kilḁ́bu

S3sg - 未 T- O2sg -「行く」- AP - 非完 F 「明日」

5.4.4.2.3. 場所

動詞が表わす行為自体よりも，それが起こった場所に焦点があてられる場合，その「場所」を適用目的語にして適用形が用いられる。

29) twahinila kutêmbɔ 「我々はリテンボで踊った」

tu - a - hín - il - a kutémbɔ

S1pl - 過 T -「踊る」- AP - 基 F 「リテンボで(17)」

5.4.4.2.4. 原因，理由，動機

動詞が表わす行為が引き起こされた理由や動機などが適用目的語で表わされる用法である。

30) gulele kīkɛ 「なぜ（何に対して）泣いているの？」

gu - lél - i(l - a) kīkɛ

S2sg -「泣く」-AP - 基 F 「何」

31) mundu dʒɔ̃la dʒuhiki líhɛŋgu 「あの人は仕事のために来ている」

mundu dʒɔlá dʒu - hík - il - i(tí) líhɛŋgu

「人(1)」 「あの(1)」 S3sg -「着く」- AP - 完 F 「仕事(5)」

5.4.4.2.5. 道具

動詞が表わす行為が施行される場合に，何か道具が用いられることを表わす用法で，その道具が適用目的語になる。

32) séndze kibêga su kútɛlakɛla 「これは料理をする土鍋です」

séndze kibéga sa kú - tɛ́lak - il - a

「これ(7)」 「土鍋(7)」 属(7) Np(15) -「料理する」- AP - 基 F

33) guhandakí kī 「何で書きますか？」

gu - hándak- i(l - a) kī(kɛ)

S2sg -「書く」 - AP - 基 F 「何」

34) hãndaki kalâmu adʒẽ 「私はこのペンで書く」

n - hándak- i(l - a) kalámu adʒẽ

S1sg -「書く」 - AP - 基F 「ペン(9)」 「この(9)」

cf.34') hãndika na kalâmu adʒẽ 「私はこのペンで書く」

n - hándik - a na kalámu adʒẽ

S1sg -「書く」 - 基F 随伴 「ペン(9)」 「この(9)」

適用形の例 34 と基本形の例 34'を比べてみると，随伴を表わす前置詞 naの持つ役割を適用形の派生辞 -il-が果たしている。従って，適用形の派生辞が付加されている場合には na は必要ないと考えられる。また構造的にも，適用目的語である「道具」が動詞の直後に位置しなければならないから，その前に naは入らないはずである。しかしながら実際の発話にはかなりゆれがある。特に，33'のように適用目的語が疑問詞の場合には，na を入れることの容認度が高くなる。この場合は動詞を基本形すると非文になる（例 33"）。

33') guhandaki ná ki 「何で書きますか？」

gu - hándak- i(l - a) na ki(kɛ)

S2sg - 「書く」 - AP - 基F 随伴 「何」

cf. 33") * guhandika ná ki [何で書きますか？]

gu - hándik - a na ki(kɛ)

S2sg - 「書く」 - 基F 随伴 「何」

5.4.4.2.6. その他

以下の例は，上記の用法に当てはまらないものである。

「強意」

35) -húgat-il- 「ふいごを強く吹く」 cf. -húgut- 「ふいごを吹く」

36) -búdʒ-il- 「直ちに帰る」 cf. -búdʒ- 「帰る」

37) -tám-il- 「きちんと座る」 cf. -tám- 「座る」

「特殊化」

38) -lɛ́kal-ɛl- 「種をまく」 cf. -lɛ́kɛl- 「投げる」

39) -bámbal-il- 「太鼓の皮をはる」 cf. -bámbil- 「つぎをあてる」

「意味の変化がないもの」

40) -dʒálil- , -dʒálal-il- 「畑の畝に１回めの土をかける」

41) -kúlil-, -kúlal-il- 「畑の畝に２回めの土をかける」

例 40, 41 は，-dʒálil-, -kúlil- を，それぞれ基本形と考えたが，これらが派生形である可能性もある。その場合は 40', 41'のように考えられる。-dʒál-, -kúl-という基本形は少なくとも現在では使用されていないが，このように考えると，基本形と適用形の間に意味の違いがないのではなく，派生辞 -il-と -alil-の間に違いがないということになる。

40') -dʒál-（基本形） → -dʒál-il- , -dʒál-alil-

41') -kúl- （基本形） → -kúl-il-, -kúl-alil-

以上，例 35～41 は，用法の上からだけではなく，「適用形派生辞を付けると動詞の項がひとつふえる」という適用形の統語的な特徴も持ち合わせていない。

5.4.5. 動詞の自他を表わす派生辞[15]

動詞の自他を表わす派生辞辞は，基本形との関係が他の派生辞の場合とは異なっている。派生辞とは，基本形に何らかの意味を付加する要素である。しかしながら，動詞の基本形自体が自動詞か他動詞のいずれかであるはずであり，自他を表わす派生辞は，新しい意味を付加するというよりも，基本形がすでに持っている性質を変化させる，ということになる。とは言え，自他に係わる派生形は，基本形が存在しないか，あるいは少なくとも現在は使われていないというものが多く，派生辞が基本形に対してどのように機能しているのかが明らかではない場合も少なくない。

自他を表わす派生辞が付く派生形は生産的ではなく固定化している。従って，これらの派生辞を任意の動詞語根に付加して新たに派生形をつくることはできない。この点は強意形派生辞と同じである（5.4.2.参照）。

本論文では，他動詞と，その他動詞と同じ動詞語根で他動詞の目的語を主語にとる自動詞を「対」と呼ぶ。以下，動詞の自他を表わす派生辞がどのように機能しているかを明ら

[15] この節は「マテンゴ語の他動詞と自動詞に関する試論－形態による分類を中心に－」『スワヒリ＆アフリカ研究』10 号（forthcoming）に修正を加えたものである。